Works

SOCIAL INTERIOR

よいものが、
循環する社会へ

CONTENTS

01 株式会社サイバーエージェント様
フォンブース243台から始まる
新しいオフィス戦略

02 株式会社セキュア様
オフィス環境を整えることで生まれた
コミュニケーション

03 株式会社Sun Asterisk様
オフィスから発信する
企業の想いと世界観

04 株式会社ジャンプコーポレーション様
Withコロナ時代に
“社員が来たくなるオフィス”を実現

05 モベンシス株式会社様
“TSUBONIWA”
で表現する企業の価値観

06 株式会社イー・ロジット様
“よい家具”を使って
フレキシブルな空間を創出

01

株式会社サイバーエージェント様

フォンブース243台から始まる
新しいオフィス戦略

「21世紀を代表する会社を創る」をビジョンに掲げ、新しい未来のテレビ「ABEMA」の運営や国内トップシェアを誇るインターネット広告事業、ゲーム事業など多角的な事業を展開している株式会社サイバーエージェント様のオフィスに、243台（2022年11月時点）のフォンブースを導入いたしました。

オフィスでも在宅のように
集中できる環境を提供したい

コロナ禍以降オンラインミーティングが社内で浸透。自席でミーティングをする社員が増えることによる情報漏洩リスクを回避するために、大量のフォンブースの導入を検討し始めた。新たな働き方に移行する中オフィス戦略として、オフィスレイアウトの影響で発生しうる情報漏洩リスクをゼロにすることに加えて、在宅と同じように集中して業務に取り組める環境をオフィスでも提供するという方針が定まった。

導入して終わりではなく、その後の費用対効果もセットで考えていくこと

予約制の有無や予約制にした場合の空予約で専有されてしまうといった運用面の課題があるなかで、場所によっては用途を限定したり、ルールを浸透させるための張り紙を作成したりと運用面で工夫を重ねている。導入の規模・投資コストが大きい分、費用対効果をよくするためにはどうするかまでをセットで考えることが重要だ。

オフィスは働く場所だけではなく、そこにどれだけ付加価値がつけられるのかが重要

オフィスが単なる働く場所という考え方がそぐわなくなってきている今の時代。サイバーエージェントは世の中の動きをキャッチアップした上で、社員の目線に寄り添い柔軟に対応しながら、コミュニケーション促進や組織の活性化など、働く以外の付加価値も見出していく。

変化していく環境の中で、「購入」ではなく「サブスク」という選択肢

ソーシャルインテリアのサービスを導入したのは、品質・コスト・スピードのバランスがよかったのと、以前食堂の家具をサブスクしたときの提案に魅力を感じたため。世の中の変化が予測しにくい時代に突入し、いつ何が起きるのかわからない現代。生き物のように変化をしていくサイバーエージェントのオフィスにおいて「購入」という選択肢ではなく、「サブスク」という選択肢がマッチした。

01

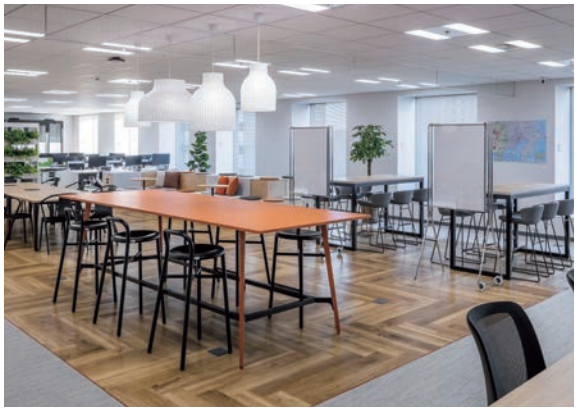
02

SECURE

株式会社セキュア様

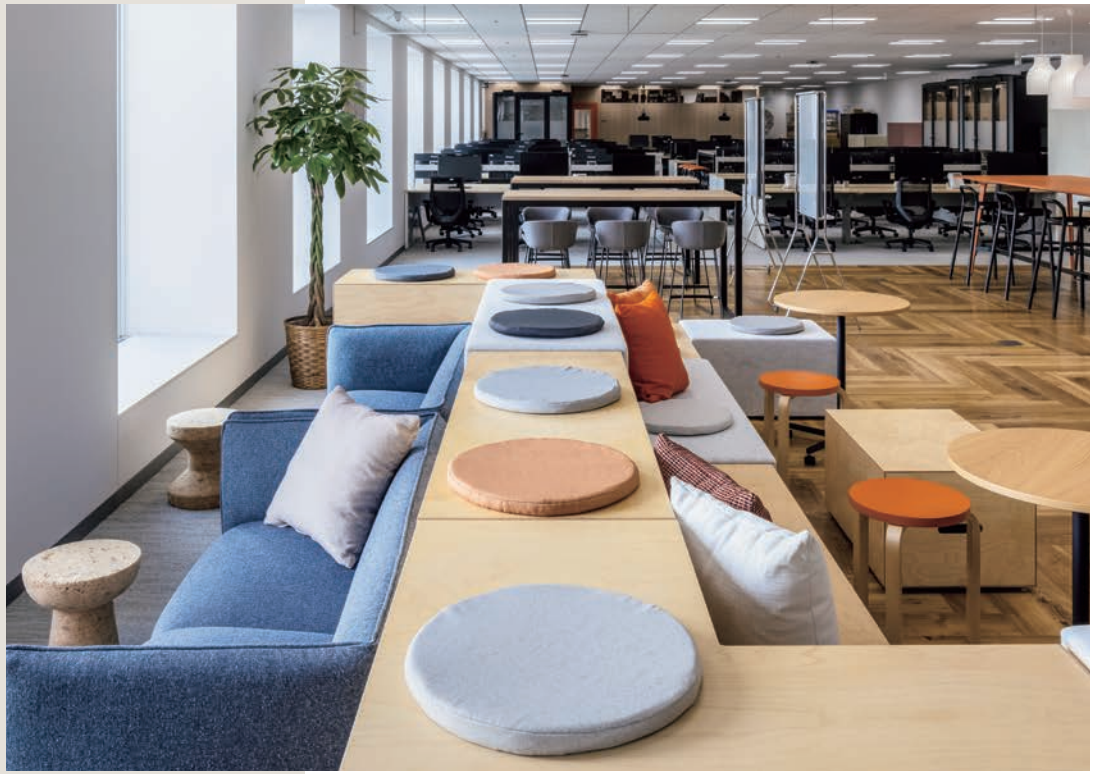
オフィス環境を整えることで生まれたコミュニケーション

「Make place SECURE Upgrade place Smart（あらゆる場所を、セキュアでスマートな空間に）」のミッションのもと、入退室管理システム・監視カメラシステム・画像解析ソリューションなど、さまざまなシーンで活用できるセキュリティソリューションを提供している株式会社セキュア様の館内増床プロジェクトを、設計・工事・デザインからレイアウト変更・家具導入までワンストップで担当いたしました。



社員が出社したくなるような“仕切り”のないオフィスを作りたい

営業部隊や管理部門は新宿のオフィス、技術検証部隊やカスタマーセンターは多摩のセキュリティシステムラボ、というように部署ごとに分かれていた事業所。コミュニケーションの手段が電話やオンラインミーティングに限定されてしまい、部署間のコミュニケーション不足が発生していた。そんな時に、様々なタイミングも重なり増床を検討。増床して新しいオフィスにする際は部署・役職など関係なく、社員皆が出社したくなるような仕切りの無いオフィスにしたいという想いがあった。



会社のフェーズに合わせて、可変性のあるオフィスを選択

ソーシャルインテリアを選んだポイントはレスポンスの速さと、意図を汲んでくれる対応力・提案力の高さ。あらかじめ伝えていた要望をしっかりと押さえたうえでプラスαの提案があった。これから人数が増えていったときにも、可変性のあるレイアウトを提案をしてくれたことは、今の会社のフェーズを理解してくれていると感じた。元々抱いていたオフィスイメージと提案にズレが生まれなかったのも、依頼を決めた要因のうちのひとつ。

オフィスの中心が、あらゆるコミュニケーションの場に

総勢120名が集まる全社会議や、朝の部署ごとのミーティングでも中央のオープンスペースを使用。オフィシャルなミーティング以外でも、社員同士がカジュアルな会話をしている姿もよく見かけ、コミュニケーションの活性化にも大いに役立つ空間になっている。極力パーテーションを立てずにフロア一面見渡せるようなオフィスにしたいというコンセプトにおいて、オフィス中央のエリアはレイアウトを考えるうえで大事なポイント。業務だけでなく歓送迎会やちょっとしたカジュアルパーティなどのイベントごとにも使える、理想的なスペースが生まれた。

カジュアルに話せる場所と雰囲気の提供が重要

中央に開けたスペースがあるのはもちろん、スタンディングデスクや1on1ブースの設置などコミュニケーションがとりやすくなるような工夫がピッタリとはまり、移転前の課題であったコミュニケーション不足が解消。かっちりとした会議は会議室で、ちょっとした相談はオープンスペースで、というようにケースバイケースで使う場所を選択できるように。カジュアルな話をしやすい場所を従業員に提供することが、社内のコミュニケーションを活性化させる近道になった。

03

Sun*

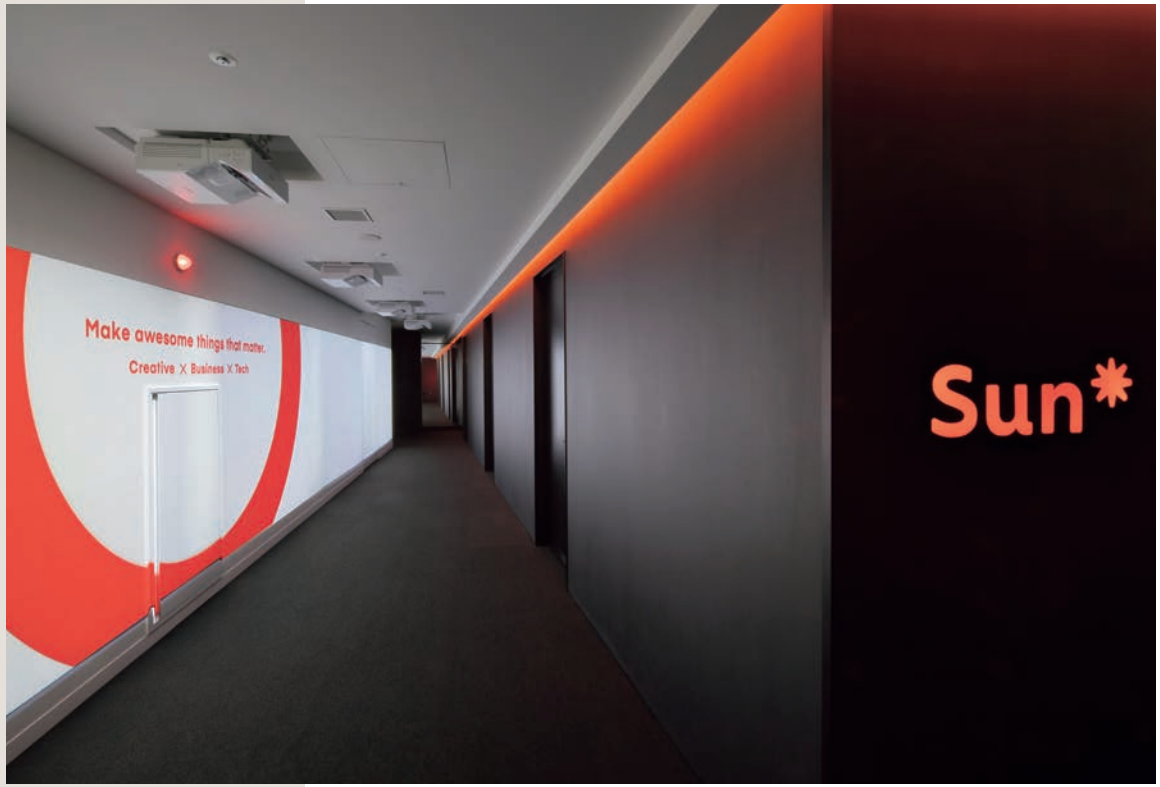
株式会社 Sun Asterisk様

オフィスから発信する
企業の想いと世界観

「誰もが価値創造に夢中になれる世界」をビジョンに掲げ、4ヶ国、6都市にて1500名以上のエンジニアやクリエイターが在籍するデジタル・クリエイティブスタジオ、Sun Asterisk様の集約移転プロジェクトにおいて、プロジェクトマネジメント、家具選定・導入を担当いたしました。

Sun Asteriskのブランドを
語れるようなオフィスが作りたい

元々両国・神田の2拠点でオフィスを構えていたが、双方の距離感やアクセスがあまり良くなく、会社の急成長に伴ってオフィスが手狭になっていた。また、業務内容的にコロナ禍以前からリモートワークを利用する社員も多く、対面のコミュニケーションが少なくなってしまっていたことも課題として上がっていたそう。アクセスがよく、広いスペースに社員が一同に集まれるような場所を探していたところ、今の大手町の物件が見つかり移転が決まった。以前のオフィスはSun Asteriskの企業としての色・ブランディングが見えにくかったので、新しいオフィスにする際はSun Asteriskがどういう会社なのか、来訪者にも語れるような設計にしたいという想いがあった。



オフィスのいたるところに感じる こだわりのデザイン

コーポレートカラーである赤を基調とした内装や、社内デザイナーがデザインした壁面のイラストなど際立つ新オフィス。地下・無窓居室の閉塞感を感じさせないように、照明にも非常にこだわっている。廊下の突き当りを鏡にして奥行きを出すことで、壁面のプロジェクションマッピングを見てもらいやすいようにしているのもポイント。

会社と社員を理解しているからこそ 叶った課題解決

イベントを行えるような広いスペースを設けて、バーを設置したことで、移転前に比べて社員同士のコミュニケーションが大きく活性化。以前よりもオフィスの活用法が効果的になり、オープンスペースでゲーム大会やお客様を招いた懇親会が開催されるなど、社員が有意義に過ごせているよう。また、オフィスのなかでブランドを語れる部分を増やしたことで、オフィスに顧客を招いて会社を案内する機会も増加している。デザイナーとして移転プロジェクトに参画した担当者様ご自身が働いているオフィスなので、各社員の希望をどのようにしてデザインに反映するかも考えて作りこめた空間が完成した。良いオフィスや家具があっても、実際にそこで働く社員の性質を理解していなければ誰にも使われないことも珍しくないが、現在も社員が各エリアを有効活用している。

プロジェクトの内容や 状況によって選べるサービスの形

ソーシャルインテリアの印象として、設計の立場でもあるSun Astriskのご担当者様からすると、プロジェクトマネジメントを依頼できることに大きな魅力を感じたそう。プロジェクトによっては予算が限られている場合もあるので、サブスクを選択することによって初期費用を軽減することも今後の利用方法として考えている。

03

04

株式会社ジャンプコーポレーション様

Withコロナ時代に
“社員が来たくなるオフィス”を実現

テレビ番組や動画コンテンツの企画・制作を主な事業とする映像制作会社ジャンプコーポレーション様のオフィス移転プロジェクトにおいて、プロジェクトマネジメント及び設計・デザインからインテリアコーディネート・家具導入までワンストップで担当いたしました。

コンセプトは
“社員が来たくなるようなオフィス”

移転前は、リモートワークの普及に伴う座席稼働率の低下と、社員同士のコミュニケーション不足に課題を感じていた。現場でコミュニケーションが取れないことで新入社員の育成に支障が出ていたり、出社頻度が少ないことで社員の帰属意識が低下してしまったりしていたことも、移転のきっかけとしてあげられる。コミュニケーションが生まれやすい環境を目指すと同時に、「社員が来たくなるようなオフィス」を、今回の移転のコンセプトとして掲げた。

自然に会話が生まれる商品を選択

レイアウトや商品は、いずれもコミュニケーションの活性化につながる選択を意識。執務スペースに採用したワークテーブル（Franka / KOKUYO）は、三角形なので、最も自然なコミュニケーションが取れる斜めの角度で向かい合える。実際にショールームに足を運び説明を受けながら商品を体感できたことで、オフィスで使用するときのイメージが湧き、導入を決めた。業務の性質上、長時間椅子に座って作業する社員が多いので、あえて座り心地・カラーの異なる数種類のオフィスチェアを導入し、社員各々が自分の体格やその時々の作業にあったチェアを使用している。

新しい環境が生み出したコミュニケーション

移転後、思った以上にフリーアドレスが社員に定着。運用開始から数日立っても座る席が固定化してしまわず、荷物を置いて帰る社員は誰もいない。三角のワークテーブルを採用した執務スペースでは部署の垣根を超えた会話も。背中合わせで仕事をするのが当たり前で会話が少なかった以前のオフィスと比べ、現在のオフィスはコーポレートカラーであるイエローを多用していて雰囲気も明るく、オフィス全体が見渡せるようなレイアウトなので自然とコミュニケーションが生まれている。

移転はして「終わり」ではなく「始まり」
働き方にあった空間を作っていきたい

今の時代、オフィスは「ただ、働きに来るためだけの場所」ではない。会社に行けば、「想像力が膨らむ会話ができる」「充実したブレインストーミングができる」など、目的を持って社員皆が集まる空間になるのが理想。今回の移転でソーシャルインテリアに依頼することを決めたのは、初回提案時「移転はして終わりではなくて始まりなので、そこから先もサポートさせてください。」という営業の言葉がきっかけだという。変化の多い時代なので、その時々の働き方にマッチしたオフィス構築を今後も進めていく。

04

05

モベンシス株式会社様

“TSUBONIWA”
で表現する企業の価値観

モベンシス株式会社様のオフィス移転プロジェクトにおいて、プロジェクトマネジメント及び設計・デザインからインテリアコーディネート・家具導入までワンストップで担当いたしました。

オフィス機能の充実を目指して

複数の課題があったなかで、第一に挙げられるのがオフィスのキャパシティー不足。社員数が急増していくなかで、座席数が足りなくなってきていたり、会議室が1つしか無いため使いたいときに使えず、社外の貸し会議室を頻繁に使ったりとオフィス機能に制約があった。事業の拡大に伴い人材の確保が急務になるなか、アクセスが良好な新宿への移転が一つの選択肢に。また、パートナー企業と技術的なディスカッションを行うための設備も整え、総合的にオフィスの機能を充実させたいという意図もあった。

トラディショナルとモダンの融合をテーマに

日本らしい伝統的な和のイメージと、インターナショナル企業としての現代的なイメージが絶妙なバランスで表現されたデザインが好印象だったことが、ソーシャルインテリアを選んだ決め手。レイアウトで目立っているのは、ショールームとしても利用している共用部分。パートナー企業とのディスカッションでも多用している。また、ショールームスペースに隣接するカフェテリアスペースも、来客者との交流や社内コミュニケーションの活性化に寄与しているようだ。

社内外問わないコミュニケーションの場が誕生

移転後、オフィスのラウンジスペースで開催された開所式では、約50名ほどの顧客やパートナー企業担当者が来訪。新しいオフィスには明確なコンセプトや案内のしやすさ、デモ機の整った環境があったため来訪者からも好評だったそう。エージェントにも好評で、リクルーティングでも良い影響を与えている。また、当初は固定席での運用を考えていたが、オープンスペースが充実していて雰囲気が良いため、そちらで仕事をする社員が多くいたり、社長も自席以外の場所で作業をしたりすることもあるようだ。

オフィス移転を社員参加型のプロジェクトに

ヒアリングを行い社員の声を反映させることが、計画の進行においても、移転後の働きやすさにおいても重要だと語る佐藤社長。実際に、会議室やスペースのネーミングを社員の公募で行い、採用されたメンバーにはギフトを送るなど、一部のメンバーだけでなくできる限り社員全員がオフィス移転のプロジェクトに参加できるように努めた。今後のオフィス空間については、グループ会社が進めている自律搬送型ロボット（AMR）の開発を、適切にバックアップできる体制・空間を整えていきたいと考えており、将来的には、社内でロボットを試験的に操作できるスペースを作りたいそうだ。

05

06

株式会社イー・ロジット様

“よい家具”を使って
フレキシブルな空間を創出

株式会社イー・ロジット様のオフィス移転プロジェクトを「SOCIAL INTERIOR｜オフィス構築支援」のサービスにて、設計・デザインから家具導入まで担当いたしました。

拠点の集約と、
連携の取りやすいオフィスを目指して

以前のオフィスの主な課題はスペースの狭さや動線に多くの社員が使いづらさを感じていたことや、拠点が複数にわかれてしまっていたこと。3拠点あった当時の運用では、各拠点ごとのコミュニケーションが難しかったため、1箇所に集約することを目指した。また、基本固定だった座席を変動席にして、社内のコミュニケーションも円滑にしたいというのもきっかけとして挙げられる。

社員に満足してもらえる“よいもの”を採用

サービス業において一番大切なのはお客様のことを考えることだが、社員のことを大切にしない会社がお客様を大切にしなさいと社員に言うのは無理がある。そういったマインドセットを持つべきだというメッセージも込めて、オフィス環境をより良くするための移転を決めたそう。移転におけるレイアウトや商品選定について、こだわった点は大きく分けて2つ。まず1つ目は可能な限りよい什器を選ぶということ。従業員の満足度を上げたいというのが移転の目的でもあったので、オフィスチェアをはじめとする家具は予算の範囲内でできる限り良いものを選定した。2つ目は可変性の高いオフィスにすること。執務スペースをセミナーや大規模なミーティングにも使えるエリアにするために、キャスター付きの家具やスタッキングできて持ち運びやすい椅子を多く採用。プロジェクターもアップデートし、旧オフィスでは開催できなかった社内セミナーの開催を実現できた。

06

垣根のない環境から生まれる フラットなコミュニケーション

新オフィスに対する不満は今まで上がってきていないそうだ。前のオフィスの最初の出勤者は大体谷辻社長だったそうだが、今は必ず誰かが先に来ている。全体的な出社率も上がっているようだ。また、ビジネスにおけるコミュニケーションだけではなく、普段の雑談もしやすい環境になった。代表や他の役員たちも席を持たず、特定の社員が持つ部屋はない。他の社員と同じようにオフィスのいろいろな場所で仕事をしている。これにより、部門間の垣根が取り払われると同時に上下の階層も撤廃され、社長と若手社員がオフィス内でカジュアルに会話するなど、より自由なコミュニケーションが生まれた。

オフィス移転成功の鍵は“コンセプト決め”

M&Aや業務提携を行っている株式会社イー・ロジットだが、今後はより多くの人を巻き込んで事業を拡大・成長させていきたいと考えているそう。現在もすでにパートナー企業や業務委託社員が同じオフィスにいるが、今後そういった人たちにどんどんオフィスを利用してほしいと語る谷辻社長。会社の雇用という軸が半分崩壊しつつある現代においてオフィスを使える人を限定的にせず、良い仲間が集まる場所にしていくというのが理想だ。

お気軽にお問い
合わせください

SOCIAL INTERIOR | オフィス構築支援

株式会社ソーシャルインテリア
107-0061 東京都港区北青山2-14-4 the ARGYLE Aoyama 6F
| e-mail | is@socialinterior.com | TEL | 03-6824-4568
| URL | https://socialinterior.com/

URL QR